宗教心理学研究会ニューズレター

第 36 号　2024.3.25

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

目次

第 20 回研究発表会報告 ---------- 報告　河村　諒　1
課題解決に向けて，神学と心理学の協働への一歩に ---------- 森本真由美　6
プロテスタントの視点から―神イメージ理論の貢献 ---------- 河村従彦　6
宗教における「組織」としての難しさと「言語化」の難しさ ---------- 武田正文　8
宗教的行動の行動分析－行動科学の可能性－ ---------- 中尾将大　9
テクネ―としての実証的宗教心理学 ---------- 西脇　良　10
神学・宗学と宗教心 ---------- 北村英哉　11
心理学と神学・宗学との距離感－誰が何を測るのか－ ---------- 佐々木　聡　13
宗教心理学研究会・第 20 回研究発表会に参加して ---------- 中野美加　14
宗教の心理学研究を始めたい！と思った ---------- 櫃割仁平　14
事務局からのお知らせ ---------- 17

第 20 回研究発表会報告

日本心理学会第 87 回大会公募シンポジウム
神学・宗学は実証的宗教心理学と連携・協働することができるのか
－実証的宗教心理学の挑戦（2）－

報告　河村　諒(愛知県立大学)

日本心理学会第 87 回大会が 2023 年 9 月 15 日～17 日に神戸国際会議場・神戸国際展示場にて開催された。その公募シンポジウムにおいて，本研究会の第 20 回研究発表会「実証的宗教心理学の挑戦（2）神学・宗学は実証的宗教心理学と連携・協働することができるのか」が企画された。今大会はハイブリッド開催（対面とオンラインの併用）であったこともあり，本発表会は 4 年ぶりに対面での実施となった。

心理学的に宗教や宗教教団を対象に調査・研究を行う際には，その神学・宗学，いわゆる宗教の教え（教義）を見据えて取り組む必要性がある。しかし，心理学の領域と神学・宗学の領域は相いれないものとして捉えられることが多く，場合によっては双方にネガティブな評価をしていることもある。このような現状を打破し，心理学と神学・宗学をいかに連携・協働へと繋げていけるかを討論することを目的に，本発表会は企画された。

以下，発表会の報告を行う。

企画説明　松島公望（東京大学）

はじめに，企画代表者及び司会の松島先生からシンポジウムの企画説明が行われた。

心理学は実証する学問である。そのため，心理学的に宗教教団を対象に調査研究を行う場合，神学・宗学の領域である宗教（教えや教義）に対して，調査や実験にもとづいた構成概念で捉えようとする。一方で，神学・宗学は宗教教団を支える根幹的な存在であり，その立場からは心理学では宗教を捉えることはできないと評価することも多い。このように，心理学と神学・宗学はお互いに相容れず，双方の領域が連携している様子はほぼみられない現状がある。

しかし，難解で捉えることが困難である神学・宗学，宗教・スピリチュアリティを対象に研究に取り組む際には，心理学と神学・宗学の連携，協働は必要であるといえる。神学・宗学の視点から宗教のより深い概念を捉えるとともに，心理学の視点からその概念についても実証する。さらに，宗教者をはじめ看護，医療，福祉，教育に携わる人たちが，現場で宗教をどのように捉えているかも重要となる。「概念」「現場」「実証」を踏まえて心理学と神学・宗学が連携，協働することで宗教やスピリチュアリティをしっかり捉えることができるといえる。

そのため，心理学と神学・宗学の現状を打開する初めの一歩として，本シンポジウムを企画した。

◆キリスト教（神学）

話題提供１　森本真由美（清泉女子大学）

『ミッション校の神精神的基軸「キリスト教ヒューマニズム」尺度作成の試み』

森本先生は，心理学を学び，博士課程を修了した後に他大学の神学部へ学部編入をし，大学院に進学された。その経歴を踏まえ，神学と心理学の研究の違い及びいかに神学と心理学を結び付けるかについて発表された。

神学は文献研究が主流であり，心理学と異なり実証研究がほとんどない。また，信仰が前提となっており，聖書をもとにした教義の学びや教義に基づく人間理解，人間観というのが基本となる。そのため，人間の心の動きについても心理学からわかるものではなく聖霊の働きや促しによるものと捉え，かつ聖霊の働きは研究できないという立場が伝統的である。一方で，若手の神学者のなかには，哲学や神学だけでは人間理解はできないとして，様々な学問と協同していく必要があるとする動きもある。

このような中において，神学における困り事や問題について焦点を当て，心理学はその支援を行うというアプローチをもって協働や連携ができるのではないかと考えられる。具体的な神学における現代社会の問題としては，①司祭や修道者，シスター，ブラザー，信徒の減少やそれに伴う教会運営等の財務といった施設維持の問題，②カトリック大学での入学者定員割れや大学の伝統の継承の問題，③国際協力や世界平和，SDGs との関係，である。これらの問題について，①信仰を持っている人たちのコミュニティをどのように運営していくか，また修道会の活動の継続や組織だけでなく教会の持つ建物や土地をどうするか，②カトリック大学の伝統をどのように学生に継承していくか，について携わっている。このうち，②について建学の精神であるキリスト教ヒューマニズムについてインタビュー調査を行い，いくつかのキーワードが抽出された。今後尺度化を行い，建学の精神をどう継承していくかについて提言することに繋げていきたい。

以上の経験を通して，何か困っていること，具体的に困っていることで神学と心理学は連携，協働できるのではないかと実感している。

話題提供 2　河村従彦（カワムラカウンセリングルーム）

『宗教と心理学の接点―キリスト教・プロテスタントの視点から』

河村先生はプロテスタントの牧師としての仕事をしている中で，人間理解をもっと深めたいと思い，臨床心理士の資格を取得し，現在は心理専門職として発達支援に携わっている。今回，人間理解の視点から人間科学と心理学と信仰にまたがる領域の接点について発表された。

プロテスタントは聖書の語り，解き明かしを重視する。そして，聖書の語りから神概念を描き出す。また，神とのかかわりを通して人間の救済と変容がなされることを明確に打ち出している。

その上で，人間理解の視点からプロテスタント

神学と心理学との接点を考える際，3 つの問題がある。①キリスト教学における心と心理学における心は異なる。霊性，肉体，心理，精神，その異同を整理しないまま心を扱うことによって生じる問題，②キリスト教は神から人間をみるという演繹的な方向性であるのに対し，心理学は人間から神についての知見を導き出すという実証的な方向性であるという研究の方向性の問題，③神を実証研究の俎上に載せることの是非の問題，である。これらを踏まえ，心理学は，人間がどういう意味で救済を必要としているかについて，受け皿となる人間の理解や材料提供を提供できると考えている。その際の神学と心理学をつなぐ理論として，神イメージ理論がある。神イメージ理論とは，人間が内在化させている神のイメージが宗教性や人間関係づくりや生き方に影響を及ぼしていると捉え，それを実証しようという理論である。神イメージ理論においては，宗教体験と健全な思考が必要であると考えている。

以上のように，人間変容への心理学的知見の貢献，プロテスタント神学が提出してきた人間変容の可能性。これらを融合することにより，総合的かつバランスの良い人間理解が可能になると考える。

◆仏教（宗学）

話題提供３　武田正文（浄土真宗本願寺派高善寺）

『伝統仏教教団における心理学研究の可能性』

武田先生は心理学から仏教を研究しようと大学院へ進学し，現在は臨床心理士，公認心理師として自坊で働きながらスクールカウンセラーや企業のカウンセラーとしても働いている。今回，心理学に対して宗学，教団側がどう感じているかについて発表された。

現場で働いている僧侶たちは，得度をし，宗学の研究機関等へ通い教義を学ぶ。その後，お経を読む専門家，法話の専門家，宗学を研究する人など様々に分かれていく。それぞれの僧侶において大事にしていることも分裂しており，対話も困難な場合もある。例えば，阿弥陀如来の教えを自分たちはどう理解したかを宣言する領解文というものが，伝統的に室町時代から使われている。この領解文を若い人やあまりお寺に来ない人に届きやすいようにと現代語に直したものがご門主（浄土真宗本願寺派のトップ）から出された。布教する人たちはこの領解文に強制的に則って法話をしなければならない。しかし，宗学者は，①「私の煩悩と仏のさとりは本来一つゆえ」という言葉は阿弥陀如来目線からは間違いないが，私たち側から宣言する言葉としては不適切ではないか，②「そのまま救うが弥陀のよび声」の「そのまま」は阿弥陀如来目線での表現であり，私たち目線では「このまま」である，という点を問題視する。このような，ともすれば納得できるけど細かい点を宗学，伝統教学は重視する一方，心理学は一般の領解文を読んだ人が実際にどう理解し，どう感じるのかを実証的に見ていく。

宗学と心理学には同じ問題に対してこのような捉え方の違いがあるが，心理学には伝統教団の形骸化を止めることができる可能性があると考える。例えば，浄土真宗は宗勢基本調査によってデータを収集しているが，その内容は運営のことだけになっている。その調査において心理学的あるいは宗教学的な，人間の内面に落とし込めるようなデータを扱うことで連携・協働につながるのではと考える。その際，宗学の立場からすれば，浄土真宗や阿弥陀如来が素晴らしいなど，恣意的にならないようにする必要がある。心理学の立場からは，信仰や仏様，神様の前で感じていることが確実に数字だけで，または言葉だけで理解できるものではないということを想定して取り組む必要があるといえる。

話題提供４　河村 諒（愛知県立大学）

『宗教を踏まえたスピリチュアルケアの実践の可能性―浄土真宗の視点から―』

本稿執筆者の河村諒からは，特に高齢者施設の現場において宗学や教団がどう携わっているのかについて自身の調査結果を踏まえて発表した。

仏教を背景としたターミナルケア施設や活動の呼称としてビハーラという言葉がある。ビハーラは，サンスクリット語で精舎，僧院，心身の安らぎ，修行実践する道場，休息の場所，病院等を指す。宗学（親鸞教学）においても，仏教の縁起的生命観にもとづくものであり，親鸞の思想にも通じるということが示唆されており，浄土真宗本願寺派の

ビハーラ活動の理念においても，医療・福祉の分野における仏教を踏まえたケアの実践として示されている。今回，ビハーラにおいて実践されている宗教を踏まえたスピリチュアルケアの具体的な内容，及び実践の評価に関するに調査結果を報告した。宗教を踏まえたスピリチュアルケアを受けた患者の遺族は概ねケアを有用と評価しており，特に信仰を持つ遺族は信仰を持たない遺族よりも有用と評価をしていた。また，高齢者施設の介護職員は，利用者，利用者家族，介護職員のそれぞれに対して宗教を踏まえたスピリチュアルケアはポジティブな影響をもたらすと評価する一方で，実践に伴う問題点や課題点についても指摘していることを報告した。

以上から，ビハーラや宗教を踏まえたスピリチュアルケアといった「現場」に対する教義的解釈や理念に関しては様々になされている。一方で，現場における実践という点ではその理念に反して温度差があり，宗教者側だとしても宗教を踏まえたケアの実践に繋がっていないあるいは繋がりにくい様子もみえる。心理学としては，具体的な実践の内容を示し，その有用性や評価を実証し，宗教者と共有することで，教義的解釈がなされている宗教の実践に繋がるのではないかと考える。

話題提供５　中尾将大（大阪大谷大学）

『仏教と心理学の接点―仏教における「行」と行動科学―』

中尾先生は仏教における行に焦点を当て，行動分析学の視点から宗学と心理学との接点について発表された。

仏教は生老病死や愛別離苦，怨憎会苦，求不得苦，五陰盛苦といった人生の問題や苦しみ（四苦八苦）を解決したいという目的がある。心理学や行動科学，行動分析学も同様に，人間とは何か，人間が幸せになるにはどうしたらいいかについて客観的にテータをとって実証する，科学する，といったように苦しみと対峙してきた。つまり，人の幸せについて取り組むというところに仏教（宗学）と心理学，行動科学，行動分析学の共通性がある。

仏教は行ずることで知恵に至る，悟りに至る，苦しみを解決するといったように，行動する宗教である。仏教の行のひとつである写経を行う理由や写経がもたらす効果について行動分析学からみた調査の結果，家族との死別，人間関係のもつれ，健康の問題等を抱えた中で写経を行うことで，精神的に安定を得たり，人間関係の改善を感じたりするということが示された。写経を含め，行の背景に仏教の教えがある。人生における如何ともしがたい問題に遭遇し，自力では解決できない時，仏を頼る。問題が解決できないまでも，写経をすることで精神的に落ち着いたり，リラックスしたりすることができ，問題に立ち向かう力や忍耐，あるいは解決の糸口をつかむことができる可能性がある。そういった精神的なよりどころとして宗教や教義がある。

つまり，仏教の行の実践は苦しみをやわらげ安らぎを得るという仏教の目的のためになされる。その際，写経や念仏といった誰もが取り組みやすい宗教的行動は実践に繋げやすいと考える。行動科学の視点から宗教的行動を分析することによって，どのように苦しみに立ち向かうことができるかを示すことができ，行の実践により苦しみの低減に繋げることができると考える。

指定討論　西脇 良（南山大学）

本シンポジウムの指定討論として，西脇先生より今回のシンポジウムに関する全体的なテーマについて振り返りがなされ，その後に各発表者の内容について神学・宗学と心理学の連携・協働の点から取りまとめがなされた。

今回のシンポジウムは，「概念」「現場」「実証」の３つのモデルのうち概念と実証についての議論がテーマとなっていた。神学や宗学の役割は，宗教教団，宗派，門徒，信者たちの家族生活や社会生活上生じる問いやニーズを受け止めて，解釈をし，指針を与えることと考える。一方，心理学は人々の宗教心を理解するため行動観察を含め質問や調査を行い，人々の意識をデータとして提供するといったように，実際に生きている人々を対象に実証がなされている。このような神学・宗学と実証的宗教心理学の連携・協働のあり方について，それぞれの話題提供者が紹介を行った。

森本先生の発表は，神学が根拠となっているトップダウンであるキリスト教ヒューマニズムの定

着度を測定するための尺度開発をボトムアップで行っている点が挑戦的である。

河村先生の発表は，日本語版の神イメージ尺度を開発されたことで，宗教体験が心理学用語で表現できることに繋がったといえる。これにより，神学との対話が期待される。

武田先生の発表は，教学解釈や組織ガバナンス体制で揺れている現状を変えようという時には客観的なデータを得る必要があり，そこに実証的な宗教心理学が貢献できる可能性があるといえる。

私の発表は，ビハーラ活動が宗学にもとづく活動であり，スピリチュアルケアとも非常に接点があることから，既に宗学と心理学との連携・協働としての実践のひとつといえる。

中尾先生の発表は，写経のプロセスを実証的に分析した応用行動分析学の理論モデルは科学的思考に慣れ親しんだ現代人に非常に合致している。仏教の教義も論理的にできていることから，応用行動分析学の理論モデルの視点と宗学は非常に親和性があるといえる。

フロアとの討論（質疑応答）

質疑応答において，2 つの質問があがった。

1 つ目は，質問者自身も学生に対して「行の効果」についてアンケートやインタビューを行っているが，その言語化について困難さを感じている。この言語化できないということについて，研究や実践の中で感じることや挑戦してみたいことがあれば教えてほしいというものであった。

この質問について，武田先生が回答された。臨床心理士としてカウンセリングを行っていると，臨床心理学を学んだだけではわからない，臨床の現場でしか味わえない空気感があると感じている。そこでは，面接相手から話を聞くためには，相手以上にこちらに言語化する力を持っていないと引き出せない。そもそも，複雑な対話の中で生まれてくるものを言語化することが臨床においては必要だと思っている。また，宗教について言語化することについて，自分自身の宗教体験を深く掘り下げ，言葉にしていくことが大事だと思い，取り組んでいる，という話をされた。

2 つ目は，質問者自身も宗教と心理学に関連する研究を行いたいと考えているが，本シンポジウムの発表者たちが皆，批判され，叩かれてきたということを話していたため，怖気づいている。自分のような研究者への励ましの言葉，モチベーションになる話を聞かせてもらいたい，というものであった。

この質問について，中尾先生が回答された。大事なことは方法論とデータの信頼性，妥当性，そして理論的背景である。これらがしっかりしていれば突っ込まれる，痛い目に合うことはあまりないので，勇気を持って挑んでほしいとのことであった。

総括　松島公望（東京大学）

今，日本社会においても世界においても，社会問題や戦争問題といったなかで傷つけあう材料として宗教が扱われている。そこで宗教を捉えると，やはり宗教や宗教教団の中核は教義であり，神学であるといえる。神理解があり，仏理解があり，そして人間理解がある。だからこそ，心理学の立場からも神学を学び，宗学を学び，なぜ宗教というものがあるのかに対してしっかりと向かい合う必要がある。そして，心理学に何ができるのかも考えていく必要がある。

深く人間を理解するために，私たちは心理学を扱う。また，人間を理解することは，ある意味宗教を理解することでもある。宗教やスピリチュアリティとは何かということを問い，そしてお互いに議論する，そういう機会をこれからつくっていきたい。

シンポジウム全体を通して感じたこと

発表者の先生たちそれぞれの立場から，心理学と神学・宗学の特徴が語られるとともに，連携・協働に際してそれらを相補的にあるいは強みをより活かした経験や研究活動内容が報告された。報告内容から，心理学と神学・宗学の連携・協働は，研究分野（概念・実証）では相いれない評価があるかもしれないが，現場の視点では需要や必要性が高いと感じた。そのような声に応えるためにも，今取り組んでいるあるいは取り組もうとしている連携・協働を形にしていき，積み上げていくことが重要であるといえる。その結果が現場や臨床，ひいては社会に対しての貢献につながると思われた。

課題解決に向けて，神学と心理学の協働への一歩に

森本真由美（清泉女子大学）

日本心理学会第 87 回大会では「ミッション校の精神的基軸『キリスト教ヒューマニズム』尺度作成の試み」という内容で発表の機会をいただいた。同研究は上智大学教育イノベーションプロジェクトの一環であり，キリスト教ヒューマニズムの理解や教育効果を実証的に考察する為の取り組みである。しかし，神学の立場からは「社会学や心理学の手法でわかるとは思えない」「神とはなにかを尺度では測れない」等の声も聞こえてきた。信仰ということを前提とすれば測れないとする考えもわからなくもないが，キリスト教ヒューマニズムの理解が大学の正規科目であれば，教育効果を測ることの意義はあると思われる。

3 年間のプロジェクトでは「キリスト教ヒューマニズム」とは何かということを検討し，明らかにしていくことであった。それはカトリックのミッション校の課題である，建学の精神の基盤である「キリスト教ヒューマニズム」を誰が担うのか，ということにも関わってくる。生き方としての「キリスト教ヒューマニズム」を体現してくださってきた修道者の減少が顕著だからである。

9 月の学会発表はまだ尺度作成のためのインタビューの途中であったが，その後尺度作成まで進み，倫理審査委員会の申請結果を待って，次の段階に進むことになっている。上智大学だけでなく，同じ理念を掲げるカトリック大学と協働しながら進めていきたいと考えている。約 20 年前に「今後，カトリック大学に修道者がいなくなるだろうから，その建学の精神を信徒が引き次いで欲しい。そのために心理学か経営学などの大学院に行ってほしい」とカトリック女子大学の元学長のシスターに言われていた，約束の一歩が踏み出せたことを思うと感慨深い。

この春，神学と心理学の協働として，カトリックの雑誌『福音宣教』でも心理学の視点から信仰コミュニティを考える連載をスタートさせていただくことになった。カトリック教会内にも宗教心理学という分野が浸透していくよう，これからも対話を続け，協働しながら取り組んでいきたいと思う。

プロテスタントの視点から―神イメージ理論の貢献

河村従彦（カワムラカウンセリングルーム）

お声がけいただいて，シンポジウムの話題提供者の一人として参加しました。宗教と心理学の接点でどのような研究と活動が行われているか，キリスト教と心理学の立場から 2 名，仏教と心理学の立場から 3 名がそれぞれ話題提供をし，指定討論の先生がレスポンスをくださるという，自分にとって大変興味深い内容でした。筆者は，臨床心理士／牧師，神学者，牧師育成の経験をふまえて，プロテスタントの立場から話題提供をしました。

参加した上での感想をとのお話しでしたので，以下，内容を 4 つにまとめました。

第 1 に，自分自身の宗派の問題意識をあらためて整理する機会になりました。シンポジウムに参加しながら，テーマはワクワクするものでしたが，同時に「なぜこれが，今頃，わざわざ研究テーマとして取り上げられなければならないの？」という違和感も感じました。

実はその違和感は，今までも感じ続けてきた率直な違和感です。宗教と心理学は，人間の幸せを目ざすものであるならば，それぞれの強みを生かし，協働して成果を上げてきてもよかったはずで

す。しかし，自分が関わってきたプロテスタントの領域で言えば，互いを牽制し合ってきたばかりか，一部においてほぼ没交渉だったという残念な歴史があります。「もっと協力し合えば，嬉しい人たち，助かる人たちがいるだろうな」と考えてきたその思いをあらためて感じる時間になりました。

人間の幸福がゴールであることが明確に描けていれば，宗教性の分析と心理学の貢献は，手段として理解できると思います。それぞれ互いの領域を明確にしながら相互補完できるはずです。もっと早い時期により深い人間理解に至ることができたのではないかと思います。

宗教の目的化についてもあらためて考えました。宗教が目的化することの問題点は，宗教者（牧師，神学者），そして一部心理学研究に関わった者として長い間考えてきたことです。若い頃，自分も，その問題で苦しみました。宗教にはまることに何かすばらしいものがあるというイメージを描きました。その背景には，人間理解の不足という決定的な問題がありました。人間を知らないまま，人間の問題を宗教に収斂させた宗教性の理解は，自分の中に抱え込んでいる葛藤に届かないものでした。より客観性のある研究が，今後期待されると思います。

第 2 に，他宗派の先生方のご研究と実践に触れることで，とにかく視野を拡げてもらえるありがたい場だったということです。今回のシンポジウムはプロテスタント以外に，カトリックの方，浄土真宗の方々が話題を提供してくださいました。いずれもとても興味深いものばかりでした。

プロテスタントは，聖書を中心に据えるという聖書主義の立場から，宗教性を言語化することにエネルギーを使ってきたようなところがあります。宗教儀礼も，聖書のことばの説きあかしが中心に据えられました。

しかし自分の実践の反省として，そのことに特化したことで見えてなかったものがあることは否定できません。宗教性には必ずしも言語化できないものもあり，長い伝統の中で培われてきたカトリックの実践には，キリスト教本来の豊かな宗教性の土壌が拡がっていることを感じます。ここ 20 年ほどでしょうか，プロテスタントの中に，カトリックから学ぶべきと考えている人たちがいて，筆者も一時期カトリックのスピリチュアリティに関心を持ち，文献を読んだことがありました。

仏教は今まで，筆者の研究・活動と一定の距離がありました。しかし浄土真宗は，親鸞の教えとイエスの教えの比較がされるなど，ある程度の親和性があるものと理解してきました。先生方のご発表を伺っていて，宗教性の深まりという点で共通点があることが感じられました。今回ご発表の先生方は，宗教性と心理学の接点を探っておられる方々ばかりですので，そのような感じを抱いたのかもしれません。

第 3 に，共通点から見えてくるものを実証的心理学を援用して研究することで，現場に資する知見を提出できるのではないかということです。比較宗教学の貢献はもちろんあります。しかし本研究会は，実証的心理学をツールとして使うという点で，比較宗教学とは異なる知見を提出することができる可能性があると思います。

さらに，共通点を明らかにすることで，それぞれの研究と実践の独自性を生かしあう風土を醸成して行くこともできます。そしてそれは，人間の実態に迫ろうとしている研究者たち，助けを求めて宗門を叩く方々に，何か価値あるものを提供できる一助になるのではないかと思います。

第 4 に，宗教性と心理学の協働の意義を確認して行く必要があると思いました。宗教性と心理学の協働は，今後欠かせないものになって行く可能性を秘めており，企画者が述べておられるように，その第一歩として，きわめて重要なステップを踏むことができたのではないかと思います。

プロテスタントと心理学は，相互不理解があったと述べましたが，逆の現象もありました。一時期，宗教を研究と実践のテーマにしてきた人たちが，無自覚・無批判に心理学に手をのばしたことがありました。宗教者が，宗教と心理学が担当するそれぞれの領域を理解しないまま心理学を取り込もうとしたため，結果として，キリスト教界に混乱をもたらしたのは事実です。それが，「心理学をやっても救済にはならない」という宗教サイドからの批判になりました。このような現象も，宗教性と心理学が協働できる認識がなかったことが背景にありま

す。相互理解が進めば，このような混乱を避けることもできるでしょうし，現場で人と向き合っている援助者・治療者が，さらによいケアを提供できたのではないかと思います。この意味で，宗教性と心理学の協働が何を与えてくれるのかを明確にして行く努力は今後さらに大切になると思いました。

最後になりましたが，企画の先生，指定討論の先生のご努力に心からの謝意を表したいと思います。

宗教における「組織」としての難しさと「言語化」の難しさ

武田正文（浄土真宗本願寺派高善寺）

宗教を超えて議論をしたとても刺激的な時間でした。私自身は仏教，そのなかでも浄土真宗本願寺派という狭い宗派のなかで日常を過ごしています。僧侶として，葬儀や法事にお参りし，ご門徒の方々と言葉を交わす中には，宗教心理の動きをリアルに感じることができます。これは私だけでなく，他の僧侶も，一般のご門徒さんも同じだと思います。大切な人を亡くされて本堂で手をあわせたとき，悩みを抱えているときに触れた仏教の教えは，その人にとって何か大切な瞬間になっています。この感覚は，宗教や宗派の違いを超えて共通するテーマであり，宗教心理学として探求していくことで多くの示唆が得られることでしょう。

先生方のお話のなかに多くの学びがありましたが，ここでは全体を通して私自身が個人的に考えたことを述べることにいたします。印象的だったのは，「組織としての難しさ」と「言語化の難しさ」だったかと思います。

宗教の歴史は古く，その教えは高度に研究されつくされています。そのなかで，宗教心理学という新しい挑戦をいかに位置付けていくのか，先生方がそれぞれのお立場でご苦労なさっているのが分かりました。伝統的な流れの中で，新たな視点を構築しようとすることには大きな軋轢があります。しかし，そのなかにも実証的に宗教心理学研究を積み重ねていくことに，さまざまな可能性が感じられました。

森本真由美先生のお話からは，尺度作成にいたるまでの背景として，たくさんの壁がありながらも素晴らしい行動力と強い思いで推し進められていることに勇気をいただきました。私自身も浄土真宗本願寺派という教団内で同じような思いを抱えつつ諦めの気持ちもあったのですが，まだまだもがいてみる余地があると思えるようになりました。

河村諒先生は浄土真宗のスピリチュアルケアとしてビハーラのご紹介をいただきました。私もビハーラ活動はとても重要であると考えており，地元ではささやかながらビハーラ活動に取り組んでおります。しかしながら，教団全体としては重要としながらも，なかなか全国に広がりにくいというのが現状です。そんななか，河村先生のように着実に実証研究を重ねておられることが大きなムーブメントのきっかけになる予感がいたしました。伝統教団が現代に即した新たな方向へ舵を切るにはエビデンスの有無がポイントになりそうです。

「言語化の難しさ」については，私自身が修士論文における調査を行っているときに痛感しました。たくさんの人にインタビューをしましたが，曖昧な宗教心理という心の動きを言葉で上手く表現することができませんでした。河村従彦先生の神イメージ理論は私のなかには無かった発想で，仏教研究へ応用することで新たな視点から言語化を試みることができそうです。先生のお話しのなかで感じたのは，宗教心理学の一つの方向性として，目の前の一人の人の宗教心理ととことん向き合うことがあるように感じました。河村先生も私も臨床にかかわっておりますので，臨床という視点から少数事例を深く考察するような試みにも挑戦したいものです。

中尾将大先生のお話はこれまで何度か拝聴しておりますが，改めて全体像を分かりやすくお話しいただき，実験という方法論の可能性を改めて感

じました。宗教はぼんやりとした流れのなかで進むため，変化が捉えにくく体験を言語化しにくくなります。写経という特定の活動に焦点を当てることで，より詳細な心理変化を描き出すことができるでしょう。どうしても宗教を議論するときには，大きな視点に立ちがちですが，小さな視点を少しずつ積み上げていくことで見えてくるものがあるように思いました。

西脇良先生と松島公望先生には，全体をすっきりとまとめてもらいつつ，今後の宗教心理学研究の道を示していただきました。教義と宗教心理学研究がどう連携・協働するかという点については，今後も議論し続けることになりそうです。今回のシンポジウムでは宗教や立場の違う人が集まり，有意義な時間を過ごすことができました。明確な答えがすぐに出せるものではありませんが，このような皆様方とのご縁こそが連携・協働の可能性を示しているように思いました。

宗教的行動の行動分析－行動科学の可能性－

中尾将大（大阪大谷大学）

去る 2023 年 9 月 15 日　神戸国際会議場にて開催された日本心理学会第 87 回大会の宗教心理学研究会主催のシンポジウムに話題提供者として参加させていただいた。今年は宗教心理学研究会が発足して 20 周年の節目と聞いた。そのようなメモリアルイヤーに研究会主催のシンポジウムに登壇させていただけたことに何やら縁（えにし）のようなものを感じていた。振り返ると私が宗教心理学の研究に着手したのは 2007 年頃であったと記憶している。当初は専門分野であった学習心理学や行動分析学の理論を宗教的行動に当てはめて説明をしたり，行動データを分析したりということを方向性として考えていた。ところが，宗教学や仏教学側のご意見や批判をいただくうちに，そのようなアプローチでは宗教心理の一部しかとらえることができないということも判明し，しばらくは，試行錯誤を続けていた。データも数量データにこだわらずに，質的なデータの分析などにも挑戦してみた。インタビューや聖職者の「語り」を通じて写経をする行動や神社仏閣に来訪する行動の心理行動モデルなども考案したものであった。それなりに実績も挙げたが，自分の中ではどこか，「心許なさ」のようなものを感じていた。そんな折，2019 年より，ヒトの行動分析を行う，「応用行動分析学」における研究を始めることになった。その最中，B.F.スキナーの著書「科学と人間行動」と出会った。この本は内容的にとても専門的であるばかりでなく，応用行動分析学的研究のヒントがたくさんちりばめられていることで有名であった。この本の中でも「宗教的行動」に関する章があった。ところが，宗教団体の信者のコントロールに関する話題に留まり，私の中では物足りなさを感じていた。この本を読んでから，私の中でもっと宗教的行動について研究のすそ野を広げてみようという思いがふつふつと沸いてきたのである。同時に宗教心理を「行動」という次元でとらえて，そこから見えてくる地平を示すこともいい仕事になるのではないかと思った。「宗教的行動の行動分析」というビジョンがみえたのだ。その時，私が抱いていた「心許なさ」の原因も明らかになった。すなわち，宗教心理を捉えるにあたり，どのような心理学的手法を用いるのかということが自分の中で定まっていなかったのであった。今回のシンポジウムでは宗教心理を捉える方法論が各登壇者間ではっきりとしていたと思われた。もちろん，行動分析学的手法には宗教心理を捉えるのに限界がある。しかし，一方でしっかりとした理論と方法論によって信頼性と妥当性のある情報とデータを提供できることもはっきりしていると思う。そして，様々な確立された手法と理論で宗教心理を捉えていくことで，人間の宗教に対する心理というものが浮かび上がってくるものと思われた。この度のシンポジウムは私の中で「実証的宗教心理学」を目指すうえでのアイデンティティーと自信をもたらしてくれたと感謝している。また，これから宗教

心理学を志す若い研究者に向けて是非とも各自の専門とする心理学の手法を駆使して「心理学的宗教心理学」を目指されるならば，実証的宗教心理学の研究は可能であるとメッセージとエールを送りたいと思った。また，今後，実証的宗教心理学が神学・宗学と連携・協働するためには，テーマに関連する宗教についても学んでおいた方がよいと思う。

最後になるが，本シンポジウムを通じて感じたことだが，人生を歩むうえで感じる「心の飢え・渇き」は宗教によってでしか解決できないのではないかということであった。科学が大きな影響を与えている現代社会だが，例えば「病」や「死」など，いかんともしがたく，時に理不尽とも思えることが人生では起こるものである。科学式では割り切れない問題に優しく手を差し伸べてくれるのは宗教や哲学ではないかと個人的に思った次第である。宗教心理学がそのような「心の飢え・渇き」に癒しを与える分野となることを願ってやまない。

テクネ―としての実証的宗教心理学

西脇　良（南山大学）

今回のシンポジウムでは，企画者である松島先生による趣旨説明に続き，5 名の先生方による発表が行われたことを受けての指定討論，というかたちで関わらせていただきました。

キリスト教の立場からは，学校における宗教教育の担い手育成を念頭に「キリスト教ヒューマニズム尺度」の構成を試みておられる森本真由美先生，「神イメージ尺度日本版」の開発を通して神学・宗学との対話の端緒を開いておられる河村従彦先生がそれぞれ発表されました。

仏教の立場からは，「新しい領解文」の解釈に揺れる教団の現状から，実証的研究を取り入れることの可能性と課題を検討された武田正文先生，宗教的ケアを実践する高齢者施設と宗教法人が経営母体ではない高齢者施設との比較調査を行い，ビハーラ実践における宗学と宗教心理学との協働を検討された河村諒先生，「写経」行動に対する行動科学的研究を通して，苦からの解放を目指し自己変容を説く仏教実践の理論化を試みておられる中尾将大先生がそれぞれ発表されました。

ご発表を通して，いずれの先生がたも，自らの実践の場と実証的宗教心理学とをつなぐ接点を模索しておられ，いわゆる「協働」に向けた可能性に期待を寄せておられると同時に，現実として横たわる課題にも，しっかりと向き合っておられるのだ，ということを実感いたしました。悩みつつ頭を抱えながらも，日々の研究や実践をこなそうとされる姿にふれることもでき，頭の下がる思いでした。

筆者からは，神学・宗学，実証的宗教心理学のいずれの立場においても，向き合う相手，すなわち理解したり対話したりする相手は「信者」であり，さらには無宗教を自認する多くの人々である，ということを指摘させていただきました。このことは，自明の事柄でありつつ，ついつい置き去りにされがちな論点でありましょう。信者のニーズに応えたり指針を提供したりする立場（神学・宗派），宗教心理や行動を理解するためにデータ提供を依頼する立場（宗教心理学），いずれも，日々の暮らしに追われる信者や人々からみれば，かなり特殊な立場に映るにちがいありません。ですからこれら三者が，お互いに水平的な関係性にあることはもちろんですが，（もしかすると実は）お互いにアサッテの方向を向いているということの自覚が，そもそも必要ではないか…。そう思ったからでした。同じ方向を向くというのはなかなか難しいことです。

話は少し変わりますが，「神学は芸術である」と言った人がいるそうです。指導教授からこの言葉を聞き感銘を受けた兄が私に話してくれました。なるほど，と思いました。芸術は人を魅了するからであり，芸術は人を生かすからです。人々を惹きつ

けてやまない芸術，命の破壊ではなく「生命の拡充」に資するという意味での，人を生かす芸術。この意味での芸術に神学がなり得るなら（またそうありたいと望むなら），人々は日々の暮らしの只中にあって，神学をみずから求め始めるにちがいありません。

実証的宗教心理学はどうでしょうか。実証的宗教心理学は芸術である，といえるでしょうか。なかなかしっくりきません…。科学的な人間理解を目指しているのに，それを芸術と呼ぶとは何ごとか，と言われかねません。ただ，「芸術」の語源（ギリシャ語「テクネ―（技術・技）」）に遡り，人間をより正しく理解するための「テクネ―」（自分が収集したデータを「与えられたもの＝datum」として受け取り，それを元にして，より正確な人間像をつくり上げるための知識や能力，という意味での技術）を芸術と呼び得るとするならば，人間の宗教性をただしく理解するための技術として，実証的宗教心理学の方法論的追究もまた，芸術と呼び得るのではないか，と考えられます。

「生命の拡充」を与える芸術も，人間の正しい理解に迫ろうとするテクネ―も，どこかで接点をもつはずです。同様に，神学・宗学も，実証的宗教心理学も，アサッテの方向を向いてばかりいずに，お互いに学び合える関係になれるとよいのではないか，と思います。

神学・宗学と宗教心

北村英哉（東洋大学：非会員）

今回のシンポジウムでは，実際にさまざまな立場で宗教に携わり，中からの視点も踏まえながら，宗教心理学が論じられ，聴きごたえがあった。宗教心理学の中心的なテーマは，その宗教を信じることで得られる効果ということがひとつの柱と考えられる。しかし，厄介なのは宗教を信じるとは，どういうことか，どういう状態であるかは，さまざまに定義可能である。また，一般にひとつの宗教は，その宗教として統合的に一貫している教義が仮にあったとしても，信者の側，人間からの視点では，どういった側面において影響が強いか，つまりどういったコンテンツに対してコミットしているかにおいてさまざまである。したがって，まず簡単に信じることの影響を調査する以前に，人にとっての多様なはたらきについて，要素分解する必要があるだろう。

河村従彦氏は，筆者がルーテル学院大学で非常勤講師をしていた際（今も継続中），学びにお付き合いした経験もかつてあったが，一貫して「神イメージ」を問うといったより本質的な要素分解を行い，神イメージと自己の在り方の変数，すなわちパーソナリティ変数との相互作用を実証的に検討していくことで，どういった傾向性にある者が宗教に何を求め，また，ある種，どういった期待を投影して，宗教に依ることになるのかを明らかにしようとしている。このあたりが，宗教そのものの学である宗教学と異なり，人と宗教の相互作用を前提にして，宗教が人に対して現実的にもたらす意味を解析している。宗教のもたらす意味の心理学的解析は，もしかしたら本来の教義からすると，人の方での不適切な受け取り方や期待かもしれず，真の教義の理解に至っていないために生じる出来事であるかもしれない。宗教学ならばその点を批判することもあるであろうが，宗教心理学としては，この現に宗教がどういった機能を果たしているかという分析が重要となる。

登壇者は皆，この立ち位置を理解しているので，宗教学が関心を向けることがらと，心理学が問題として取り上げる事象やことがらにずれがあることを，しばしば発表の中においても説明しておられた。

宗教と密接にかかわる思想や価値観という地平においても，要素分解は可能であり，ある種宗教教義の本体にも近いものであろうが，森本氏が取り上げた「キリスト教ヒューマニズム」の探究も興味深いものであった。これらの要素分類は，広く

社会の一部に存在する価値観や考え方（思想，教え）をもひとつの社会的現象であると，筆者の専門である社会心理学の立場から見れば，現実の現象を深く探究する道筋の中に位置する研究であると捉えられる。

また，河村諒氏の示しているケアの問題も，ひとつの効果研究を進めた道筋の先にあるテーマとして宗教実践と絡めて，人に対するその役割を考察したものとなっていると考えられる。

すでにこのビハーラと呼ばれる活動の中に重要な宗教が胚胎されているわけであろうが，あらためて筆者から見て，これまでの効果研究や現象研究を中心とした宗教心理学の流れからは，やや異質ながら，宗教行為として本質的に重要な行を取り上げた中尾氏の指摘は興味深かった。

筆者は，大学院生の頃から，宣言的知識と手続き的知識の違い，その効果的振る舞いの違いに関心を寄せ，実質的に，社会的認知領域における手続き的知識の役割を博士論文テーマとしたものである。その観点からすれば，皮相的ではあるが，教義は宣言的知識，すなわち，理解し，知り，記憶に残るものであるが（宗教家はきっとそうは言わず，後の手続き的知識と一体であってこそ意味があると述べると予想する），修行の行為やその教えを日常的に実践する行動が，手続き的知識，すなわち，一連のプロセスというものの獲得の側面に関わるシステムなのであろう。

禅の修行をするにあたって，掃除や食事の用意，食べ方などが，何の意味があるのか，初心者は疑問に思うが，その実践こそが宗教であるという話はよく耳にする例示である。瞑想や写経の行を行動分析学から捉えた視点は斬新であり，今後の展開が楽しみであると感じられた。

武田氏が提示した領解文の問題は，宗教的関心のある筆者からは知的関心を惹くものであり，また，こうしたものが出現するプロセスとして，教義そのものよりも，往々にして人は，伝承者や上位管理者などの人物をあがめる方向にターンしていきやすい，そうした人というものの性向が垣間見えて興味深かった。また，よく指摘されることでもある，信じて，徹底的に「身を任せる」ことが重要とする点が，浄土真宗とキリスト教の共通点としてあることを思い出した。

私個人はプロテスタント会衆派であるが，実のところ，宗教心理学の催しに積極的に参加しようと考えるのは，キリスト教の効果が知りたいからではなく，現象ベースというよりは，理論的に他のさまざまな社会的行動を説明する要因として重視しているからである。どうして日本人は主張が弱いのか，人目を気にするのか，こうした文化心理学や社会行動でしばしば取り上げられる行動傾向のおおもとである原因に，ひとの宗教心があるからと考える。紙数もないので，その本格的議論はいずれ機関誌に投稿したいと考えるが，こうした観点からも，指定討論者であった西脇氏の自然観の業績は関心も近く，よく参照させていただいている。教義としてまとまった宗教の効果よりも，自然と山や川に尊い気持ちを抱いてしまうことを私は宗教心と呼んでいるが，これも論者によって定義が全く違うところである。こうした宗教心がさまざまな人の行動の下敷きになっているという点で，宗教心は深く基底的な心情であり，そこを見ないと人がわかったことにはならないだろうと確信し，引き続き，宗教心理学の動きには注視を絶やさないつもりである。

知的刺激を多く受け，楽しませていただいた本催しの企画者であり，この感想記を勧めてくださった松島氏に最後に感謝を申し述べたい。また，実証的に確実な研究を進めるには確かな当事者からの神学・宗学の教えと意見を参照し，連携することが重要で，実りのある成果を生み得ることは確信したが，相互的にメリットを享受していくには，まださらに多くの取り組みを行っていかねばならない課題も感じられた。今後，自身を含め，課題にいかに向き合うかを問うていかねばならないと感じされたシンポジウムであった。

心理学と神学・宗学との距離感－誰が何を測るのか－

佐々木　聡（高野山大学）

日本心理学会第 87 回大会公募シンポジウム「神学・宗学は実証的宗教心理学と連携・協働することができるのか－実証的宗教心理学の挑戦(2)－」において，まず特筆すべきは，登壇者の背景にある宗教について細かな配慮がなされていたことでしょう。カトリックにプロテスタント，浄土真宗を中心とした仏教。「神学・宗学」をテーマに掲げているからには当然の設定と言えるかもしれませんが，それを実現するのはまた別の話でしょう。ここで改めて，企画者ならびに登壇者の先生方に敬意を表したいと思います。

さて，本シンポジウムを通じて立ち現れた課題の一つとして，教団との関わり方，距離の取り方があると考えられます。抄録の企画趣旨においても「神学・宗学の領域と心理学の領域はほぼ没交渉となっており，時にネガティブに相手側を見ている場合も少なくなかったように思われる」と指摘されていました。そして，具体的には，話題提供の中で，森本真由美先生が，神学は「教義に基づく人間理解・人間観」を持っていることを指摘し，その文脈での研究の難しさについて体験を踏まえて言及されました。

その一方で，教団側に「様々な学問領域との協働が必要」という流れが生じているということも登壇者共通の思いでしょう。いわゆる「宗教離れ」の時代に，それぞれの教団が様々な形で自らの営みを言語化しようとする動きは今後ますます活発化する可能性があります。一方で，河村諒先生が示された通り，心理学の側が宗教の需要や有用性をテーマとしてとりあげる際に宗教家の関わりを求めているという側面もあります。

そこで浮かんでくる疑問は，誰がどのような立場で心理学による研究をするのかということです。本シンポジウムでは，宗教者として実証的宗教心理学に向き合う先生が多く登壇されましたが，中尾将大先生がご自分を在家信者であると紹介なさったことから分かるように，客観性を追求する心理学的手法であっても，研究者の立場は研究の枠組みに少なからず影響を与える可能性があります。これは，単純に教団内部／外部の者が研究するのがふさわしいという議論ではなく，その研究者の立場が研究に与える影響について，常に振り返る必要があるということです。

次に，本シンポジウムで関心を持ったテーマは「測定」や「言語化」の問題です。実証的心理学の研究においては，評定を含めた言語的報告に依る部分が大きくなりますが（もちろん，ほかに生理的指標などを活用することは考えられます），ここで，武田正文先生が指摘された，「測定はできない」，「言語化できない」という宗学（神学）との立場の違いが問題として浮かび上がります。

本シンポジウムのテーマである「連携・協働」という観点に絞って考えると，神学・宗学の側に，「心理学が本来（神学・宗学の立場からすると）測定できないものを測定しようとしている」という認識，すなわち「心理学が宗教の領域を侵す」というコンテクストができてしまうと，まさにこの「連携・協働」の前提が崩れてしまいます。「実証的な心理学の手法をもって何を測ろうとしているのか」という点については相当に丁寧な共有が必要なのではないでしょうか。

安易に結論を出すことは避けたいと思いますが，何を測ろうとしているのかという構成概念の話だけではなく，「神や仏そのものを記述しようとしているのではないこと」，「心理学で測ろうとしている（測れる）のは全体の一部にすぎないこと」という測定の限界についてもあわせて共有することが必要ではないでしょうか。さらに，例えば，一般の人が了解可能な形で記述できるといった測定のメリットについても話し合っていくのがよいように思います。

以上，シンポジウムに参加して個人的に考えたことを書かせていただきました。すべての話題提供，討論が大変刺激的なものでしたが，ここでそのすべてには触れることができなかったことについてお詫びしたいと思います。本シンポジウムが，

様々な現場において神学・宗学と実証的宗教心理学の連携・協働が具体的な形で進む契機となることを強く願っています。

宗教心理学研究会・第 20 回研究発表会に参加して

中野美加（保健所・非常勤心理士）

久しぶりに対面でのシンポジウムに参加し，発表者，聴衆の熱気を直に感じることができました。また実証的宗教心理学の最前線におられる研究者の皆さんの，それこそたった今，取り組んでおられるテーマに触れることができ，とても感銘を受けました。仕事では臨床の現場に身を置いており，ここしばらく研究から少し離れた場所にいたので，快い刺激を受けました。

と，いう感想に嘘はありませんが，正直な第 1 印象は「え！レジュメがない!?」でした。大会初日の 9 時開始です。しかも 10 分位前に会場入りしているのです。思わず係の方に，「あの，まだレジュメが並んでないんでしょうか？」と聞いてしまいました。多分，宗教心理学研究会加入以来，初めての経験です。多くの方に実証的宗教心理学の今を聞いていただけて本当に良かったなあと，ちょっと偉そうに保護者の気分にもなってしまいました。

個々の発表に触れる力も勇気もありませんが，改めて思ったのは，宗教心理学の奥深さです。そして，質的研究法がいろいろあることに新鮮な驚きと喜びをおぼえました。「そこからですか？」ですよね。論文や関連本に目を通す量が格段に減ってしまっていることを痛感致しました。

率直な思いを最後に小声で書きますと，学問や心の健康等への貢献はもちろん大切なのですが，純粋に信徒の心を，思いを知りたいです。2 世問題が世を騒がせていますが，キリスト教でいえばカトリックやリベラル派のプロテスタントの家庭で育ち，悩みながらも何となくクリスチャンを続けているような普通の信徒たちの宗教心理を知りたいと，発表を聞きながらひっそりと思っていました。

宗教の心理学研究を始めたい！と思った

櫃割仁平（京都大学大学院：非会員）

2023 年 9 月 15 日，私は「実証的宗教心理学の挑戦」というタイトルに惹かれ，本シンポジウムに参加しました。数年前から日本心理学会には参加していたとはいえ，私の大学院生活のほとんどはコロナ禍と重なっており，対面で参加するのは初めてで，その 1 発目がこのシンポジウムとなりました。参加された方には共感して頂けると思いますが，その熱量たるや学会のフィナーレにもなりそうなほどだと感じました。

私は，宗教の心理学研究をしているわけでもなく，俳句という世界最短の詩を題材に，「美しい」と感じる人の心を実験的に研究しています（個人的には，宗教と芸術，審美的な感性というのは近接領域だと思っているのですが）。ただ，自分のバックグラウンドに宗教があったり，研究室の先生や先輩方が宗教の研究もされておられたりしたので，いつかはやってみたいという気持ちがありました。今回のシンポジウムに参加して，その気持ちが強まりました。

今回のテーマは，神学・宗学と心理学，または宗教家と研究者の橋渡しを考えることであったと思います。私はその後者に当たると思うのです

が，教義で書かれていることや宗教家の話されていることで，心理学の構成概念で説明できそうなことは多そうだというのが 1 番に感じたことです。ただ，これだけを言ってしまうと，前者の方々に批判をされたり，ハレーションが起こったりするというのも容易に想像できますし，発表者の方々はその辺りのバランスをうまく取りつつ，ここまで研究を発展してこられたのだろうなと敬服致しました。この「心理学で説明できることも多い」ということについては，宗教に関することだけではなく，私の研究分野である芸術でも同じくらいの温度感で思っています。例えば，私が修士の 1 番最初に行った研究では，イメージの鮮明度が高いほど，俳句の美しさの評価が高いという結果を示しました（図 1)。この結果を「俳句の美はイメージで決まる」と言ってしまうと，俳句の熟達者の方から，そんなに単純なものではないと言われてしまうだけだと思いますが，「イメージの鮮明度で説明できる側面もある」と伝えることで，そこから対話ができるのではないかといつも考えています。図 1 のグラフを見ると，たしかに全体の傾向としてはルールがありそうですが，各ポイントと右肩上がりの直線には差があり（残差)，単純化して書くと，この残差を紐解いていくためには，他分野の専門家や実践家の力が必要になるのではないかと考えています。今回のシンポジウムは「神学・宗学は実証的宗教心理学と連携・協働することができるのか」というタイトルでしたが，個人的には，「できるかどうか」というよりも，「必要である」と考えました。

自分の専門に寄せて書いてしまいましたが，最初にも申し上げた通り，先生方の挑戦的なテーマ設定と実際に対話を深めておられる様子に刺激を受けています。「始めたい」ともったいぶった書き方をしてしまいましたが，実は，宗教の心理学研究に足を半歩ほど踏み入れました。あのシンポジウムの後，自分の研究テーマとも関連をさせながら行うことができるアイデアを構想し，先日予備調査のデータも取りました。今後，本研究会でも発表したり，議論したりすることを楽しみにしています。もちろん，神学や宗学の専門家の先生，宗教家の方々も交えて。

引用文献

Hitsuwari, J., & Nomura, M. (2022). How individual states and traits predict aesthetic appreciation of haiku poetry. *Empirical Studies of the Arts*, 40(1), 81-99. https://doi.org/10.1177/0276237420986420

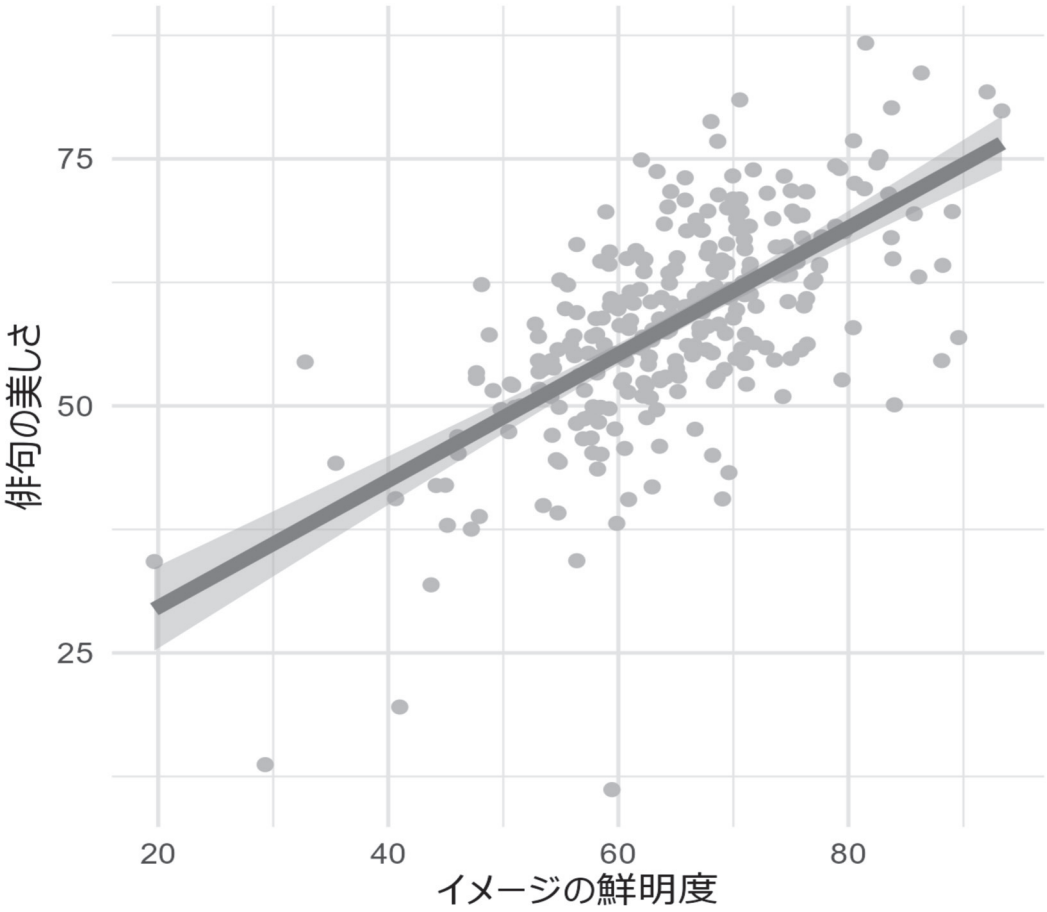

図 1　俳句のイメージの鮮明度と美しさの関係（Hitsuwari & Nomura, 2022 を改変）

事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第 36 号が発行されました。今回の内容は，日本心理学会第 87 回大会公募シンポジウムの報告，発表者・参加者からの感想となっております。今回も非常に示唆に富んだ原稿が集まり，非常に充実したニューズレターとなりました。

「神学・宗学は実証的宗教心理学と連携・協働することができるのか」とのテーマは私自身の中で長きにわたって取り組みたいと思っていたものでした。そのテーマを宗教心理学研究会発足 20 周年に日本心理学会公募シンポジウムにて行うことができたことはとても感慨深いものでした。

しかし，このシンポジウムが「始まり」であることも思います。このシンポジウムを起点として，実証的宗教心理学と神学・宗学との連携・協働についての取り組みを具体的に展開していきたいと考えています。それらの取り組みについても，今後，宗教心理学研究会にて報告することができれば幸いです。

今回のニューズレター第 36 号を始め，これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見，ご感想をお待ちしております。（K.M.）

［宗教心理学研究会の今後の予定］

2024 年 9 月 6 日(金)～8 日(日)

日本心理学会第 88 回大会公募シンポジウム（第 21 回研究発表会）

会場：熊本城ホール

発行：宗教心理学研究会
編集：宗教心理学研究会事務局

研究会事務局
担当：松島公望［psychology-religion@office.so-net.ne.jp］
研究会ホームページ管理・運営
担当：藤井修平［yrsk.f@nifty.com］

研究会ホームページ
http://psychology-of-religion-japan.org/